

Title	貿易政策の効果分析を中心として：最近の文献よりの覚え書
Sub Title	Some notes on effect of foreign trade policy
Author	白石, 孝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.10 (1951. 10) ,p.615(63)- 618(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19511001-0063
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511001-0063">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511001-0063</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

よつて領主権をおびやかすだけの闘争力は失われた。逃散、都市流入等が彼等に残された唯一の反抗手段に過ぎなかつた。かくして戦國大名の根本的課題は農民の逃散を終熄せしめて、領國を安泰ならしめることであつた。分國大名領の構造は實に農民が始めて領主と直接的に對應することを可能ならしめたのであり、領主が直接農民生活の再生産確保のために「農政」を最大の課題とせねばならない時代であつた。然しこの時代の農民層の存在形態を分析した研究は史料の缺乏から極めて少く、僅かに中村吉治氏の「近世初期農政史研究」が光るのみである。しかしこれとても地域的な考慮を拂うことなく、全国的に史料を任意に抽出している點は、今日の段階から見れば既に物足りない感がある。今後は地域的に各大名領下の農民生活の實態が跡づけられる必要がある。この時代の農民の共同生活に於ける自治的團結組織である郷村制或いは惣の問題に就いては早くから研究が行われて、それが如何に分國大名によつて逆用され、封建的支配を強化するに役立つたかという點まで追及されているが、それすら今一度地域的個別研究によつて深められ再検討されなければならない時期が來ていると思う。

ひるがえつて領主制の面から見ると、守護領の研究が漸く端緒につき始めたのに對して分國大名の戦國諸侯領の構造については殆んど未だ研究が行われていない状態である。かつて鈴木良一氏は山城大和を始めとする近畿一帯からは強い戦國諸侯が

れ、分國大名を頂點とした封建的ヒエラルヒーが末端まで一貫した形で結成せられたこと、の三つが擧げられているが、それはあくまで一つの見透しに止まるものであり、分國大名領の個別研究は今後急速に進められることが必要である。

最後に戦國動亂に終止符を打つた織豊政權の歴史的性格に就いては、最近多くの議論が行われているが、この政權が戦國諸侯との激しい闘争の中から成立したものであることを考えれば、問題は單に織田豊臣二氏の側のみでなく、それと戦つて敗れ或いは和した諸侯の領國支配の構造、更にその根柢にある領國內農民層の分化の實態等が究められなければ解決が困難であると考えられる。史料の關係から見て甚だしく困難を豫想されるこの仕事は、しかし、今後の中世經濟史研究が如何にしても立ち向わなければならない大きな課題の一つであらう。(完)

- (1) 永原慶二氏「封建前期の民衆生活」(新日本史講座)所收
- (2) 牧野信之助、牧健二、松本新八郎氏等の諸業績
- (3) 鈴木良一氏「純粹封建制成立における農民闘争」(社會構或史大系)所收 一一九頁
- (4) 牧野純一氏「後北條氏民政史論」、渡邊世祐氏「後北條氏の民政」(戦國時代史論)所收、松本新八郎氏「室町末期の結城領」(封建的土地所有の成立過程)所收 等はこの意味で貴重
- (5) 永原慶二氏「日本における封建國家の形態」(國家権力の諸段階)所收

貿易政策の效果分析を中心として

生れず、東海・北陸・中國・四國等の地方では下剋上によつて新に戦國大名が生れ、東北・九州地方では舊來の守護がそのまま戦國大名に轉化しているといつた三つの型があるが、これは一體何に由来するものであらうかとの問題を提起された。そしてこの問題は一應解答の見透しはつけられている。即ち畿内を始めとする先進地帯は農民分化が進んでおり、土一揆の激しい蜂起によつて在地豪族の力が弱められ、寺社本所・幕府の力を相對的に強め、それが戦國大名の成長を妨げた。これに對して東北、九州地方は階級分化が進まず、隨つて土一揆の強い戦いが無く、守護領主の惣領制的支配が永く残つたため、強力な戦國諸侯は生れなかつた。その中間が東海・北陸・中國・四國地方で、そこでは下剋上は相當に進みはしたが、然し土一揆の「百姓」が解體し武士と農民とが分れる前に中心勢力が形成され、それが戦國大名として登場するのである。確かにさういふことはありうべきことである。然し島津、伊達、北條、武田、上杉を始めとする個々の戦國大名の領主制の構造は未だ全然と言つてよい程明らかでなく、すべては今後の研究に俟たねばならぬ状態である。分國大名領を封建社會の確立段階として把える理由として、(1)純粹封建社會の基本的階級たる獨立小農民が廣汎に成立してきたこと。(2)莊園領主・寺社本所領は没落し、過渡的權力である室町幕府もその存在理由を失ひ古代的殘滓がほぼ完全に消滅したこと、(3)武士階級が階級として完全に結集さ

資料

貿易政策の效果分析を中心として

——最近の文献よりの覚え書——

白石 孝

戦後においてうら續いた國際收支の激しい不均衡、景氣の下降の世界的徴候、戰時的ブームへの飛躍等々、理想的構圖への接近にほど遠い國際經濟事情は、貿易政策論の主要な課題を、新しい國際經濟の秩序と結びつけた貿易政策のあり方から、より具體的な諸手段の效果分析へと移すに充分なものがあつた。一九四九年末におけるアメリカ經濟學會の年次總會と共に開催された計量經濟學會の席上、平價切下の現實的效果が關心をひく中心的な討議の對象となつたのも、これをよく反映したものとみなされるであらう。文献においても、この種の理論的解明は多數にのぼつてゐるが、その大部分が現實の不均衡や安定性を缺く世界を念頭に置くものであることは注目に値する。

二

勿論その接近方法についてめだつてゐるのは、所謂「所得」

雇傭分析のそれであり、局面は常に景氣波及の國際的動態現象におかれつつ、直接の考察対象を國際收支機構、爲替相場にむける試みを手に行うことが出来る。しかしこの直接の二つの対象の分析は必ずしも同様の条件のもとに行われてはいない。前者は依然國際收支均衡化メカニズムとして問題を提起し、所得水準の變化を中心に組立てられるために、價格變動なし、爲替相場固定という最も常識的な假定が設けられる。もつともこれは、國民所得、支出、輸出入の乗數的關係の檢出を容易ならしめるためでもあるが、他方積極的意味において、失業が存在し貨幣賃銀が非伸縮的な場合に、右の均衡化調整が價格水準の相對的變化によつて充分に達し得られないということを出発點としているからに他ならない。マツラップ・メツラーの當初の分析はこの典型的なものであつたろう。いずれにしても、かかる條件乃至内容をもつた理論分析の成果のうち特にここに指摘されるべき重要なもの一つは、貨幣量の安定だけでは輸出に對する需要の變動より生ずる所得變動を相殺するに不充分であるという論證と、國民經濟をして金本位の束縛から脱せしめ、經濟變動より隔離するを得るような國際貨幣制度への要求である。(S. Leussen and L. Metzler, Flexible Exchange Rate and the Theory of Employment, R. E. S. Nov. 1950, pp. 281-282) また完全雇傭は國際貿易を均衡に導き得ず、爲替管理なくしては不可能であるというあまりに悲觀

的な見解に對する檢討として生まれた爲替相場變動の效果分析である。(W. F. Stolper, The Multiplier Flexible Exchange and International Equilibrium, Q. J. E. Nov. 1950) かくて今や國際收支の均衡化メカニズムの考察はその出發點にひきもどされることとなつた。ここでは爲替相場—雇傭—物價の關連が以上の歸結の上に論求されようとするのである。

III

爲替相場に關しては、一應これとは無關係に種々な角度からとらえられて來た。「均衡爲替相場」「爲替相場の安定條件」はその主要な課題であり、特に弾力性理論がこの分野ほどはなばなしい役割を演じたものはなかつたと思われる。(L. Metzler, The Theory of International Trade, A Survey of Contemporary Economics, 1950) しかしこれを一歩すすめて、爲替理論の體系よりみれば、現代のそれが新しさを主張する點は、若干の論者を除いて購買力平價説に甘んじ得ず「均衡爲替相場」の概念をほりさけて、國際收支の項目の變化とその在り方を問ひ、この均衡を結びつけることになつたといわなければならぬ。(R. Nurkse, Condition of International Monetary Equilibrium, Essays in International Finance, No. 4, 1945) 實際、購買力平價説が均衡相場の定義を準備し

得なかつたことは誰しもが認めるところであるが、國際收支の均衡—均衡爲替相場が論理的に成立するとき、爲替理論は大きな飛躍をとげたといふべきであらう。だが同時にこれは、爲替相場に關する諸論求が原理的に「他の事情相等しければ」という假定を除去して、國際收支均衡化機構論と同一局面で展開する必要を意味するものに他ならなかつた。かくてここでは國民所得—爲替相場—貿易差額の一連のメカニズムが分析の對象として登場する。(K. M. Savosimisk, National Income, Exchange Rate and the Balance of Trade, Economica, May, 1950) またこれは、爲替相場それ自體のもつ現實的性格からも當然の歸結でなければならなかつた。即ち、國際收支均衡化機構論がドル不足問題に無關心でいられなかつたと同様に、或はそれ以上に、爲替理論は最近の爲替相場管理政策、特に平價切下を組上にのせる必要があつたのである。そしてこの種の政策が所謂「構造的調整」をもたらすものであることには多くの意見の一致をみたが、そこには「構造的調整」とはいかなることの意味するのか、或はどのようなメカニズムによつてなされるのか、更にかかる爲替相場管理政策の採用は不可避的なものであるかどうか、不可避的であるとすれば、いかなる場合に許さるべきかが當面の課題であつた。かくて愈々爲替理論は「均衡爲替相場」の規定を媒介とし、弾力性理論の成果を投入して、所得—雇傭分析を主體とする國際收支均衡化機構論に統一され

てゆかなくてはならない。それはとりもなおさず、ロビンソン以降の理論的諸業績をもとの故郷へ結集することであらう。(J. Robinson, The Foreign Exchange in, Essays in the Theory of Employment, 1937)

貿易政策の效果分析をより一層現實の世界に接近させるためには、かかる理論的擴充と統一がまず行われなければならない。さもなければ、たとえいくつかの複雑な条件を挿入したところで、分析上の距離はまぬかれ得ないであらう。具體的には平價切下に關する諸見解にその傾向をみる事が出来る。勿論われわれは英國のポンド切下を主題とする優れた著作 Devaluation and the Cost of living in the U. K., J. L. Burtle and W. Liepe (R.E.S. Vol XVII) をはじめ古典的一試論と思へる Immediate Effects of Deviations on Prices of Raw Materials, Barend. A. de Vries. (I.M.F. Staff Paper, Sept. 1950) に接し得たが、いずれも弾力性理論を現實の諸條件の中に展開したにとどまり、クライテリオンとなるべきものを缺き、對象とする政策手段の窮極の效果を曖昧に残しているようである。

もつとも國際收支調整政策に關しては既にミードが無差別曲線の效用によつて支拂不均衡點と均衡點との利益指標の推移を明らかにし、その效果の歸するところを幾何學的に説明してゐることは注目値する。(Meade, A Geometrical

Representation of Balance of Payment Policy, *Economica*, Nov. 1949) 即ち、契約曲線上の貿易均衡點は國際收支のあり方を考慮するかぎり、國際收支の不均衡をマニシヤル援助などによる信用供與によつて調整されてゐる「支拂不均衡點」として現わされる。こゝでミードは形式上均衡點であつても、本来「支拂不均衡點」であるところのものが、國際收支の調整策が講じられた場合如何に變化するかを説明しようとする。勿論これによつて變化する契約曲線上の兩國國際交換均衡點の推移は、國民所得を一定とするかぎり輸入品に對する需要の弾力性に依存するであらう。そのために十の圖表が作成されてゐる。しかし單に均衡點の位置の變化だけでなく、支拂不均衡點と均衡點との間の比較が行われ、兩國の利益の指標が求められる點、たとえマニシヤル——レオチュエフ——ハーバラーの幾何學的説明の適用を出ないとしても、貿易政策の效果分析にこれを援用した試みは新しいものといわざるを得まい。最近のミードが好著 *Balance of Payment, 1951* に次いで發刊せるこの種の試みの集大成は期待されるべきであらう。

四

政策效果分析の最近における今一つの問題は、政策手段の選擇に關するそれである。衆知の如く、國際收支の不均衡改善には種々の政策手段が用いられる。この場合でも、二つの立論の

仕方が考えられる。その第一は如何なる政策手段が國際收支の不均衡改善に效果的であるかという比較検討、第二は同じ不均衡改善の手段でもどちらが *better off* であるかという比較検討のそれである。しかしこれらは屢々第二義的に扱われて來てゐる。というのは、國際收支の不均衡の改善を自體、一層廣範な政策基調によつて判斷され、高次の安定的經濟活動水準とか完全雇傭政策の視點から、國際經濟政策という廣い場面で扱うことを求められてゐるからに他ならない。そこでは、右のよるな貿易政策に固有な問題が、その背後に押しやられる傾向は少な難いところである。それにもかゝらず、事實はこれらの問題に對してなんらかの理論的解明を要求してやまないであらう。第一の比較検討はこれまでの純粹理論の接近を容易に許すけれども、第二のそれは前述の如き量的な效果分析をもつてしては必ずしも期待し得ないかも知れない。例えば、あまりに明瞭な相違をもつ二つの政策手段の比較は別として、輸入のための外貨費消制限と爲替平面切下との比較は容易ではない。(Sidney. S. Alexander, *Devaluation Versus Import Restriction as an Instrument for Improving Foreign Trade Balance*, Staff Paper, vol. 1, No. 3 April, 1951) ことに貿易政策の厚生費用分析が多大な役割を演ずる所以を指摘することが出来るのである。それは矢張り貿易政策の面における價值體系の問題を暗示するものではなからうか(未完)

論文紹介

フィリップ・ウォルフ

『ツールーズにおけるイングランド産の毛織物』

(Philippe Wolf, "English Cloth in Toulouse,"

*Economic History Review*, 2nd Series, Vol. 2,

No. 3, 1950, pp. 290-294.)

中世イングランドにおける毛織物の輸出については未だよく知られていない。然し早くも第十四世紀以來イングランド産の毛織物はツールーズにおける重要な輸入品の一つとなつて來た。ガロンヌ上流地方に關する現存資料も亦ツールーズにおけるイングランド産毛織物の掛買が盛であつた事實の一端を示している。

イングランドはツールーズに毛織物を供給し、そしてツールーズの界限に産する必要な大青を得てゐた。イングランド西南部のサマセットやデヴォン産の毛織物はブリストル港から積出され、ハムプシャやウィルトン産のものはサザムゲトン港から、又イングランド東南部のイースト・アングリヤ産の毛織物はロンドンかコルチェスター港から、いづれも南フランスのベイヨン港へ送附されたのであつた。そして一旦ベイヨンの波止場に陸揚された毛織物は大抵はモルラーヌ、オルテー、オ

ロンの商人に引取られ、ペアルン地方の人達の手により直ちにゲーブ・ドゥ・ポーに沿つて運ばれ、タルブでアドゥール河を横切り、それから後はガロンヌの上流を下つて目的地のツールーズまで持つて行かれたのである。

ツールーズに運ばれた毛織物の主な色合は赤・淡・紅・黒・緑・淺藍であり、赤褐色や深紅色のものもあつた。又その品種は様々であるが、主なものは濃・赤のモラトウス、豫め違つた色に染められた絲で織られるメスクラトウス、イースト・アングリヤに産する幅の狭いドツェナ、黒のグレダ、赤のヴォヤ、それから一四三〇年から三六六年にかけて始めて現われた様々な色の最も廉價なルエラであつた。價格に關していへば、ブルツセル産モラトウスが一カン (cannes, 一・七九六メートル) 三磅一志五片に對しイングランド産のそれは三磅であつて、僅かではあるが廉かつた。又イングランド産のルエラは、當時一カンにつき一磅七志六片から一磅の間を上下していたラングドックの普通品よりも更に低廉であつて僅か十一志三片という廉價であつた。これ等の他は一カンにつき二磅十六志三片から二磅五志の間の價格で、全般に變動が少なかつた。しかも品質は確實であつた。従つて中産者に特に喜ばれ、ツールーズを中心に廣く愛用されていた。結局北はカオール、ロデー、東はカルカソンヌ、南はピレネー、西はコンドームを結ぶ廣い範圍にイングランド産の毛織物が消費されていたのである。